
遙かなる聖戦

Glaray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる聖戦

【Nコード】

N2929Y

【作者名】

G l a r a y

【あらすじ】

西暦1015年における地上の女神・アテナと冥王ハーデスの聖戦。

著者オリジナルです。原作登場キャラは一切出てきませんのでご了承下さい。

基本的に設定は原作に忠実ですが、原作には登場しない星座の聖闘士や魔星の冥闘士が登場します。

原作と比較したりして楽しんで頂ければ幸いです。感想お待ちしております。

前兆

O m e n (前書き)

タイトル若干変えました。

今後全部こんな感じで英語入れます。

永遠に戻って来られぬかも知れない闇の中にいるのだと思った。
彼女は地面に倒れていた。

打ちのめされた様に、僅かに立ち上がる気力も眼を開く気力も無い。
い。

しかし、「自分がやらなければ他に誰がやるのか？」という警告
染みた言葉が突如脳裏をよぎった。

彼女は渾身の力で手を地面に付き、体をやっこの思いで起こし、
眼を僅かに開く。

点々と続く血の跡。

それを這うようにして辿っていく。

血の滴がポタポタと零れ落ち、池を造っていた。

その上をやっと頭を起こして見上げる。

剣の切っ先であった。

彼女の額に滴が落ちた。

「もうこれで終わりだ」

声が響いた。

深淵から轟いている様な、恐ろしく低い、圧力のある声であった。
同時に、彼女の頭上に剣が振り下ろされる。

躲す術はなかった。

「きゃあああああ！！！！」

彼女は自分の叫び声で目を覚ました。

石造りの寝台から勢いよく身を起こすと、窓から僅かに日の光が
差し込んでいることに気が付いて胸をなで下ろした。暗闇の中に取

に残されていなかったからだ。

それにしても、今の夢は何だったのだろうか：生々しい感覚がまだ残っており、動機がおさまらない。

「ア：アテナ！？」

突然、部屋の入り口の扉が乱暴に開き、入ってくる者があった。均整の取れた見事な長身に、割り方質素な布の服を着ている。豪奢だが芸術的な藍色の長髪を持つ美青年だが、その繊細な顔立ちは今狼狽してやや崩れている。

「：カライス？」

彼女―地上の女神・アテナは青年の姿を見て少し驚いた。自分はどれだけ大声で叫んでいたのだろうか：カライスはかなり遠くで寝ていたはずなのに。

「ごめんなさい、何でも無いのです。ただ：かなり怖い夢を見てしまっ」

アテナは寝台から下りると、来訪者に向かって微笑みかけた。太陽の輝きにも勝る、温かく眩しい笑顔だ。

それを認めると、カライスは女神にも劣らない穏やかで優しい笑顔を浮かべて返し、丁重に跪いた。本来彼はこういう雰囲気を持ち主のようだ。

「それなら安心です。ただ、貴女のお声が余りにも大きかったので、一体何事かと」

「こんな事は、滅多に無いことですからね：。本当にごめんなさい。とりあえず、外に出て話でもしませんか」

「御意」

カライスは身を起こし、先に部屋を出た。アテナもそれに付いて行った。

歩きながら彼女は考えていた―嫌な予感がする。最近、教皇も玉座を外してよくスターヒルに登っているようだ…まさか。

聖戦

Holy War

「アテナ神殿」――ここは聖域サンクチュアリと呼ばれる一帯で最も神聖な場所で、岩山の頂上にある。アテナを守る88人の聖闘士セイントの中でも最強を誇る12人の黄金聖闘士ゴールドセイントがそれぞれ守護を任された宮殿、更には聖闘士達を統括しアテナを補佐する存在である者の「教皇の間」を一つずつ突破しなければ神殿に辿り着く事はできない。それゆえ神話の時代よりただの一度も敵の侵入を許した事は無いのだ。

ここに「祀られた」女神とその守護者は巨大なアテナ神像の前にいた。開かれた右手に乗っているのは翼ある勝利の化身？ニケ、左手が添えられているのは聖楯イージスである。その荘厳で慈愛に満ちた姿はどんなに深い闇の中にも光明をもたらししてくれるようだ。

「あなたと初めて出会ってから、何年になるのでしょうか」

アテナはふと思い付いたように、カライスの方に向けて言った。

「13年です。あの頃、貴女は私の身長半分位でしたね」

「そんなに小さかったかしら：」

カライスの言葉に、アテナは遠い昔に思いを馳せた。

人の身に生まれた地上の女神だと分かって聖域に連れてこられた時、彼女はたったの4歳だった。女神の栄えある近衛兼世話係に任命されたカライスは14歳であった。それ以来二人はずっと一緒だ。「主人と家来」と言うよりは「妹と兄」と言った方が良いような、気の置けない間柄である。

「ゼテスに会った時は驚いたわ。あなたと全然見分けが付かなかったもの」

「私か兄か当てる遊び、しましたね。外したのは最初の一回だけでした」

カライスは懐かしそうに微笑んだ。

「ゼテスは馬鹿らしいと言わんばかりの態度だったわ」

「申し訳ありません：兄は生まれた時からああいう人なのです」

「いいの。だからあなたとゼテスの見分けが付くようになったのよ」

二人は声を立てて笑った。裏表の無い空間。彼女は束の間不安を閉じ込めて置けた。

教皇アトレウスは玉座の上で黙考していた。

昨晚老体に鞭打って登ったスターヒル―教皇以外出入りが禁じられている、地上で最も天に近い場所―での事が気掛かりであった。スターヒルは代々の教皇が吉凶を占う天体の観測所で、教皇は特にある一つの星に注目しなければならぬ―小熊座の尾の首星？北極星だ。

本来この星は、天頂より約1度離れた場所で輝いているものだ。しかし、250年に一度、その角度が0になる時がやって来る。その時、全ての聖闘士はアテナの為持てる力全てを尽くして戦わなければならない。例え命を棄てたとしても。

教皇が前回、前々回と北極星を観測した時より、今回は明らかにそれは天頂に限りなく近づいているのだ。

これでは、「その時」が来るのは時間の問題である。聖闘士の数も揃わないというのに：殊に、最下級の青銅聖闘士ブロンズセイントでも、神話の時代よりアテナの側に常にいて闘ったというあの聖闘士がいないのだ。

「失礼致します」

教皇の間の扉が、重々しい音を立てて開いた。

精悍な顔つきをした青年が一礼して入って来た。勇壮な長身には聖闘士の防具？聖衣クロスが纏われている。その色はまばゆい黄金色だ。

カプリコーン
「山羊座のユバルホークか。如何した」

「実は、聖域北の遺跡の方角から、とてつもなく邪悪な気配を感じるといふ報告を受けまして…調査したいのですが」

教皇はぞくつとした。思わず声が大きくなる。

「黄金聖闘士達をここへ集めて参れ。話はそれからだ」

「…と申しますと…!？」

ユバルホークは気が付いたようだった。僅かに眉間に皺を寄せる。教皇は頷いた。

「去る壮絶な戦いより250年…再び、冥王ハーデスとの聖戦が始まるのだ」

迫る時

The Time Is Near

小一時間後、教皇の間には八人の黄金聖闘士、そしてアテナとカライスがいた。二人は教皇が直接アテナ神殿まで行って呼んできたのだった。玉座の横にはアテナとカライス、正面に黄金聖闘士達が片膝を付いた状態で二列に整列した構図だ。普段滅多に顔を合わせることの無い黄金聖闘士同士が大勢で、しかもアテナと一カ所に居合わせるのは極めて希なことである。

「この度君達を集めたのは他でも無い：直に始まるであろう、冥王ハーデスとの聖戦について少し話があるからだ」

教皇の言葉で、その場に在る者全員に緊張の波紋が広がった。アテナは「やっぱり」という顔でカライスをちらりと見やった。カライスはそれに気づき、眼で返事をした。

「動かざる星・北極星、この星が天頂に來ると冥王との聖戦が始まるという。私はこの所スターヒルにて北極星の位置を観察し続けて来たが、それが天の中心に近くなる速度が急激に速まっているのだ。これでは、聖戦が始まるのは時間の問題：遅くとも、三ヶ月後かも知れぬ」

教皇はそう言って下を向いた。黄金聖闘士達の間でどよめきが起こる。アテナも思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

「教皇…！」

「聖闘士の数もろくに揃っていないというのに！？」

「…承知しておる」

攻撃的な口調で言った者があったが、教皇は厳かにそれを制止した。教皇を批判するのは筋違いというものだが、教皇はそういう心境を察した。

「事態を予測できなかった私の過失だ、本当に申し訳なく思っている。しかし、聖戦はまだ始まってはいない。落ち着いて聞くのだ。確かに言う通り聖闘士の数が足りないのは明白だ、しかしそれを解決するのは焦りでは無かろう。今この場に居ない四名の内、三名が居ない理由を考えてみよ。聖闘士候補生の修行の為のはずだ。彼らが使命を果たすこと…直前まで、それを待ってみるのだ」

「…」

教皇の静かだが力強い言葉に、場は再び静まった。

「さて、本題だが、先程ユバルホークより伝達があった。聖域北方の遺跡群から強大な邪悪な気配を感じるという報告を受けたため、それについての調査をしたいとのことだ」

前列の一番右にいたユバルホークは、顔を床の赤絨毯に向けたまま首を縦に振った。

「無論調査を許可する。しかし一つ、あの遺跡群は前聖戦の冥王軍拠点—ハーデス城の跡である事は全員聞き及んでおろう」

場の沈黙は肯定を意味していた。

「『跡』とはいえ、十二分に危険性を孕んだ場所であるのは間違いない。そこで、山羊座のユバルホーク、射手座のシルヴェラよ」

「はっ」

「何でしようか」

ユバルホークと、後列左から二番目にいた者が顔を上げた。シルヴェラは小柄な、十代半ばと思われる少年だ。明るい茶色の短髪と大きめの瞳がまだ子供っぽさを残しているが、背に翼のある黄金聖衣を纏ったその姿には威厳さえある。

「私は、君達二人が適任だと判断した。異論の有る者は？」

声を上げる者は誰一人いなかった。

「それでは二人とも、頼んだぞ。聖域内の青銅聖闘士、白銀聖闘士シルバーセイを何名か選り出し、早速調査に向かうのだ」

「御意」

二人は立ち上がって一礼をすると、入り口の巨大な扉を開けて退出した。

「残った六名よ、話はこの通りだ。冥王復活の兆しは見え始めてきた：君達是最強を誇る黄金聖闘士だ。しかし、その力を過信すること無く、日々精進してもらいたい。以上だ」

その言葉を聞き終えると、六人の黄金聖闘士達はおのおの立ち上がって教皇の間から退出し始めた。

ところが、その中で一人玉座の横に控えている二人の元へとやってくる者があった。

「兄さん」

カライスはやや驚いたように、その人物の顔を見据えて呟いた。見事な長身、優美な藍色の長髪、そして繊細で彫刻の如き顔立ちは

カライスと一部たりとも違わない様に見えた。ただ、その身に纏う
雰囲気は峻烈を極め、カライスの温和なそれとは全く質が異なる。

「俺は自分の宮を守るのが仕事かもしれん。だがカライス、何か
あった時真っ先にアテナを守るのはお前の仕事だ。…これから頼
むぞ、我々の女神を」

それだけ言うと、カライスの生き写しは身を翻して扉の方へと歩
んだ。言い方はぶっきらぼうであったが、どこか優しかった。

「…ありがとう、ゼテス兄さん」

カライスは微笑み、兄に向けてそう言った。アテナと教皇が、視
界の端で頷いているのが見えた。

闇の剣

Sword in the Darkness

ユバルホークとシルヴェラは、白銀聖闘士三名と青銅聖闘士二名と共に聖域北部の荒野を進んでいた。

本来なら年齢的な面でもユバルホークがリーダーとして行動するのが妥当なところだが、一行を先導しているのは意外にもシルヴェラであった。聖衣の背の翼のせいで、走っているというよりも飛んでいるように見える。

「シルヴェラ、ちょっと速過ぎないか。付いていけないぞ」

シルヴェラの後ろをやや遅れてついて行っているユバルホークが、他五人の気持ちを代弁するかのように言った。

「分かりましたって」

反抗期の子供染みた返答を見ると、シルヴェラは羽ばたきの速度を遅くした。概して黄金聖闘士は俊足だが、シルヴェラの足の速さは群を抜いている。足が速い方のユバルホークでさえ付いていけないのだから、まして他の者は尚更だ。

「ライノ、遺跡の方角から邪悪なものを感じたのは、朝になっからいきなりか？」

ユバルホークは一番後ろを走っている少年に前を向いたまま声を掛けた。彼はユバルホークの弟子で、一角獣星座の青銅聖闘士だ。ユニコーン朝異変を感じたことを師に伝えたのはライノである。

「正確には、昨日の晩ロドリオ村にいた時に感じたんです」

ロドリオ村は、聖域に最も近い村だ。教皇アトレウスもよく表敬訪問している。聖闘士には馴染み深い場所だ。

「…一緒に居たアンキセスも、何か感じたと言っていました。けれど、割と一瞬の事だったので、言うのはそんなに急がなくてもいいかなと思って…」

罪悪感を感じたのか、ライノは言葉を切り明るい水色の瞳を曇らせて下を向いた。隣を走っている大柄な少年―大熊座のアンキセスベアーもうつむいている。しかしユバルホークの対応は穏便だった。

「そういう事は、自分で判断せずにすぐに俺達に伝えるんだ。もしかしたら、重大な事かも知れないんだからな。…だが、言ってもらえた分には良かったぞ。ありがとう」

「は、はい！」

少年達の表情はぱっと明るいものに変わった。

「隊長、おかしいと思いませんか」

何分かして、そう言ったのは白銀聖闘士・蛇遣い星座のエリンナオビュクスだった。一行の紅一点で、有数の実力とすらりとした肢体の持ち主だ。黒髪緑眼の美女だが、「女性聖闘士は仮面を付けなければならない」という掟に従ってその麗しい顔を隠している。

「何が？」

シルヴェラが返事をした。ちなみに、「隊長」という呼称はシル

ヴェラがユバルホーク以外の全員に強いたものであるが、五人とも乗り気で使っている。

「遺跡が全然見えて来ませんね。そこまで遠い場所でも無いはずなのに…」

「あ…言われてみれば、確かに」

遺跡は聖闘士の足なら二時間もかからないような距離にある。しかし、もうかれこれ一時間以上は走っているのに、影形も見えてこないのだ。

どういう事だろうか。

全員がそう思った矢先、先に行くシルヴェラの姿が忽然と消えた。

「隊長!？」

白銀聖闘士、青銅聖闘士の五人はうろたえて足を止めた。

眼前はただのただっ広い荒野で、遙か向こうに町の建物が見えていた。いるばかりだ。

シルヴェラの気配も影も無くなっている。

「何処へ行ったんだ…?」

ユバルホークも足を止めて辺りを見渡し、そう呟いた。しかししばしの間考え込んだ後、躊躇無く再び走り出した。

「大丈夫だ。行くぞ」

後ろを向いて、手で「まっすぐ行くぞ」と合図をする。

「え?」

「保証はする」

困惑している五人をよそ目に走っていたユバルホークの姿も消えてしまった。

「全員着いたね」

シルヴェラの声だった。彼は倒れた柱に乗って五人の方を見ている。ユバルホークも、もともとは此処にあった建造物の入り口だったと思しき場所に立って待っていたらしい。

五人は、このほとんど岩石の土台と崩壊した柱以外に何も残っていない場所が、一行の目的地であるということはずぐに理解できた。しかし、一体どうなっているのか。

「ここには、結界が張られている」

五人の心の内を見透かしたようにユバルホークが言った。

「ちょうど、聖域全体に張られているやつ様なものだ。普通の人間にはその存在すら知覚する事の出来ないように施された一少しものが違うが、そんな所だろう」

「なるほど、それで遺跡が外からは見えなかったんですね。そして、隊長が消えたのも…」

「そうだ。結界の中に入ったからだ」

合点がいった背の高い白銀聖闘士の少年・ペルセウス座のレイファートにそう答えると、ユバルホークは何時にも増して深刻な顔になった。

「…しかし、最近になって急に此処に結界が張られるとは…やはり、冥王復活の前兆なのだろうか。それに、この邪悪な小宇宙^{コスモ}…」

遺跡の上空を覆っているのは暗雲で、結界の外の爽やかな朝の空とは全く違っていた。今にも豪雨が降り出すか雷鳴が轟きそうである。そして、場所全体に充満しているのは気分を害するほど強烈な邪気であった。例えるならば何者かの憎悪―怨恨を思わせるような。

「あれは、何だろうか？」

不意にシルヴェラが柱の上からそう言った。その眼はかなり広い遺跡の中心方向を見ていたが、そこから尋常では無い邪気が発せられているのが全員に分かった。

「行ってみようか」

シルヴェラは柱から軽やかに飛び降りると、視線の先へと向かった。他の六人もそれに付いていった。

「これは…」

一本の剣だった。

円形になった、祭壇の様な部分の中心にしっかりと刺さっている。銀色と言うべきか、闇色と言うべきか、荒廃したこの遺跡の風景には似つかわしくない程の光沢を放っている。刀身には神秘的な文字が彫っており、その柄の部分には血の赤をした宝玉がはめ込まれている。

しかしそれは美しいという以上に、何か生々しく毒々しい雰囲気醸し出していた。事実、邪気はここから発せられていた。

「剣…?」

シルヴェラがそれに近づいた瞬間。

「うっ!?!」

剣を一瞬包んだ暗黒の結界によって、シルヴェラは吹っ飛ばされた。

地面に背中を叩き付けられる。

「シルヴェラっ!!!」

「俺は大丈夫…だけど、聖衣を着ていなければ、大惨事に違いないよ…!」

ユバルHOOK始め、六人が倒れたシルヴェラに駆け寄った。怪我をしていないとはいえ、相当痛そうに顔をしかめている。

「今の衝撃は、一体…」

「それはハーデス様のご意思の強さです」

「!?!」

一行の背後から声がした。振り向くと、そこに立っていたのは女だった一つややかなぬばたま色の長髪、漆黒のドレス、黒く塗られた爪—妖艶なうら若い女であった。

しかし、真っ先に覚えたのは戦慄だった。

「何者だ!」

ユバルHOOKは手刀を構えて一喝した。シルヴェラも立ち上がり、

聖衣の背から黄金の弓矢を出し女の心臓向けて番えた。

女はその牽制をもともしないかのように言い放った。

「私はパンドラ。冥王ハーデス様の下僕にございます」

闇の剣

Sword in the Darkness (後書き)

いよいよ次話戦闘シーン&冥闘士―ただしオリジナルの登場です。
乞うご期待！

幽冥の徒

Spectral
Ones (前書き)

更新遅れて申し訳ありませんでした…
では早速第五話です。

黒一色の装いの女・パンドラは、いつの間にか剣の傍へと来ていた。

「…!？」

最大限の警戒をしていた筈の黄金聖闘士二人にも、彼女が何時動いたのかわからなかった。

聖闘士達は皆一様に驚くばかりだった。

「この剣はハーデス様の剣。地上におけるハーデス様の依り代となるお方だけが、これを抜くことができます」

パンドラは剣の柄に優しく触れた。

「そして、このパンドラこそがその人物を此処へ導く役目を仰せ遣ったのでございます」

言い終えて手を剣から離すとゆっくり歩み出し、自分に拳、あるいは矢を向けている相手に近づいた。

ユバルホークもシルヴェラも、他の五人も、何も出来なかった。それは、パンドラが非力な女性だからという理由ではない。ただ、彼女が自分達の思考も行動も全て抑圧する何かを醸し出していたからだ。

「ハーデスの依り代だって？」

張り詰めた空気に一石を投じようとしたのはシルヴェラだった。

「そうです。地上で最も清らかな魂を持つ少年―ハーデス様はそれを好まれます」

「あんたはそれを探して連れてくるんだよね？」

「そうです」

「だったら、今ここで…」

ユバルホーク始め六人が息を飲んだ。シルヴェラの弓を引く手が強くなる。しかしパンドラは相変わらず淡々としていた。シルヴェラはただ強がっているだけとでも言うように。

「ええ、殺せば良いのです」

パンドラは表情一つ変えず、そうとだけ言って艶めかしい唇を閉じた。

「…っ」

シルヴェラは矢を番えたまま放つことが出来なかった。放つことが無意味だと直感したのだ。

「…さて、ハーデス様は強く願っていらっしゃいます」

パンドラは、硬直している七人の間を悠々と通り抜けて語り始めた。

「一刻も早く、ご自分の魂の器を、そしてそのお住まいを手に入れ、今度こそ全てを終わらせることを」

突如、辺りの風景が揺らぎ、壮大な城の内部と化した―あたかも

最初からそこに城が存在していたかのように。崩れた柱も土台だけになってしまった広間も影すら残していない。

「これは、一体…？」

しかしその景観は七人が周囲を見回すとまもなく蜃気楼の如く消え失せ、また元のように石造りの遺跡があるばかりだった。

「幻か！？それにしては…」

「幻ではありません。これは半ば精神の存在にして半ば現実の存在たる、ハーデス城の記憶、です」

ケンタウルス星座のユングビィの言葉をパンドラが遮った。

「記憶だと…神の記憶は、尚も留まり実体を持つとでも言うのか！？」

このときユバルホークが言った事は全員の思考を反映していた。

「その通りです。ハーデス様のご意思の強さ—あの剣に宿るハーデス様のご意思の強さが、この空間を造り上げているといっても過言ではありませんまい」

そういつてパンドラが剣の方を指差すと、剣からまたシルヴェラを拒絶したような結果が束の間出現し、消えた。バチバチと電撃が迸るような激しい音が弾け、剣の刺さった部分の石が砕けて消滅した。シルヴェラは誰より真剣な顔でそれを見つめ、冷や汗が背中を伝うのを感じていた。

「そのご意思の強さとは—そこまでハーデス様が心を砕かれてい

らっしやる事とは。：おわかりでしょう？」

最後の何でも無いような言葉が、七人の心に衝撃を与えた。
パンドラは笑った一余りに美しく不気味に。
そして、懷から小さなハープを取り出した。
それを奏で始める。

「…」

七人の聖闘士達は、幻想的だが迷宮を彷徨える錯覚を覚える、不可思議な旋律の中凍り付いていた。

相手を牽制する形のまま、ユバルホークとシルヴェラ達はそれ以上の行動に至ることが出来ない。

女一人に優位に立たれるのは恥だとは、微塵も思えなかった。

それどころか、何だ、この今まで味わったことの無い、恐怖と畏怖の入り交じった感覚は—！

ものの数分間の後、パンドラは一番細く短い弦を強く弾いた。

透明で破壊的な音が淀んだ空気を震わせる。

次の瞬間、七人は異様な緊張状態から解放された—

—がしかし、すぐさま新たな緊張状態に入る。

「お呼びでしょうか、パンドラ様」

虚空より声がした。そして闇より、亡霊の如く一つの影が現れる。
闇に溶け込まんばかりの全身を覆う鎧の色、マスクから覗く白い
秀麗な顔、黄金聖衣のように輝く長い髪が強烈な対照性を成す。
そうしてパンドラの横まで歩み出てくると、すでに臨戦態勢に入
っている聖闘士達の姿を認め、ふっと笑った。

「…!!!」

七人の全身を何かが駆け巡った—
こいつは、とんでもなく強い。

それも、黄金聖闘士級…!

「それは…」

口を開いたのはユバルホークだった。

「…冥界の深淵と死を宿す、聖衣と対極の存在・冥衣—サープリスお前は、
百八の魔星に選ばれし冥王の戦士、冥闘士が一人か!…!」
スペクター

漆黒の男は不敵な微笑を浮かべたまま返す。

「そうだ。そして俺は、高邁なる天星に選ばれし、天慧星シムル
グのテイレシアス」

幽冥の徒

S p e c t r a l O n e s (後書き)

前話の後書きで「次回バトル」と書きましたがすみません、詐欺でした… (汗)

次話では本当にバトルになるので、ご了承ください。

暗黒の靈鳥

D a r k e n e d S i m o r g h (前書き)

やっところさバトルシーンです。

結構がんばったんですがやはり駄文ゆえ、申し訳ありません… (泣)

暗黒の靈鳥

Darkened Simorgh

「天慧星シムルグだと…!?!」

「天慧星の冥闘士…!」

ユバルホークとシルヴェラは息を飲んだ。冥闘士の宿星・百八の魔星は36の天星と72の地星に分けられ、その中でも、天星の冥闘士は特に強大な力を持つと言われる。冥闘士最強の「冥界三巨頭」の宿星は天星だ。

「テイレシアスよ。青銅二人に白銀三人、それに黄金二人…ハーデス城の下に埋める人柱、またはその首を直接ハーデス様に献上する生け贄としては悪くないでしょう」

パンドラはハープを懷にしようと、身を翻しやや語気を強めていった。

「冥闘士の中でも屈指の実力を誇るお前なら、全員血祭りに上げられるはずです」

もうその姿は闇の中に消えていた。

「御意…」

冥闘士はそう呟くと、冥衣の背から二枚の鋭角的な翼を出して空を切った。

「…! 来るぞ!」

ユバルホークが叫ぶや否や、凄まじい突風が起こり七人の足を揺らがせる。

「まずはその、青銅^{ブロンズ}のデカブツからだ……！！！！」

テイレシアスの拳がアンキセスの大きな体躯に迫る。突風に耐えるため両腕を交差させた姿勢のまま、アンキセスは動くことが出来ない。

「アンキセス！！！！」

暴風の中、真っ先にライノが身を躍らせた。

「くられ、ユニコーン・ギャロップ……！！！！！！」

ライノの足から目にも止まらぬ速さで無数の蹴りが繰り出され、敵の拳をすんでの所で弾き返す。テイレシアスは形の良い唇を無造作に噛むと、宙で一回転して七人の後方に降り立った。
ひとまず風は風ぐ。

「すまねえ、ライノ……」

「こういう時は、お互い様だ……！！」

申し訳なさそうに言うアンキセスに、ライノは汗を拭って答える。
攻撃を当てるだけで精一杯だ。

「青銅にしてはやるようだな、一角獣座……」
^{ユニコーン}

「感心している暇は無いぞ、冥闘士^{スベクター}！！」

不敵に言うテイレシアスだったが、間髪入れずに今度はユバルホ

ークが飛びかかった。

「喰らうがいい、^{エクスカリバー}聖剣、！！！」

研ぎ澄まされた剣の如く、鋭利な手刀が空を裂いてティレシアスに襲いかかる。

「！！」

ティレシアスは瞬間的に身を仰け反らせ、致死の斬撃を免れた。しかしそれも束の間、第二撃目、第三撃目とユバルホークが舞うように手足を繰り出す。

鋼鉄の剣の如く鍛え上げられたユバルホークの手足は、触れたものの全てを切り裂くと言われる程強力だ。その全てを余す所無くお見舞いした暁には、いかなる敵であろうとも肉片と金属片の塊となる――そうとさえ言われている。

しかしティレシアスが最初の一撃を躲したのはまぐれではなかった。

まさに刹那の間を縫って、完璧に斬撃を避けている。

背後で地面がユバルホークの拳圧により割れる轟音を聞きながら、ティレシアスは口元に笑みさえ浮かべていた。

「全て躲すか……！」

「思ったより遅いな、^{カフリコーン}山羊座」

余裕に満ちたティレシアスの態度に、ユバルホークは歯ぎしりした。

冗談じゃない……黄金聖闘士でもシルヴェラに次ぐ速さを誇る俺の拳を、避ける余地がまだまだあると言っても言うのか！？

「今度はこちらから行くぞ、！！！！」

テイレシアスの両手の中で圧縮された空気の弾丸が形成され、ユバルホークの腹部を直撃する。

「ぐおっ…！」

腹が潰されるような痛みにも悶えながら、ユバルホークは後方に吹っ飛ばされた。

ズシャアという音を立てて聖衣と地面が摩擦する。

「先生！！！」

「ユバルホークさん！！！」

アンキセスとライノがすぐさま駆け寄る。

続いてエリンナとユングビーが飛び上がり、上空から同時に攻撃を仕掛ける。

「私達が行くわよ、‘サンダークロウ’！！！！」

「‘フォーティアルフィフトウラ’！！！！」

爪から迸る電撃と炎の渦とが、漆黒の鎧を危険な輝きで照らす。絶対に避けられる距離ではない。

「ふん…」

テイレシアスは一步も動かなかった。その代わり両手を広げる。

「‘ミラージュ・スフィア’！」

テイレシアスの周囲に陽炎のように揺らめく球体膜が出現し、霧も同然に攻撃を消し去った。

「な…私達の攻撃を…」

「膜一枚で無効化するだ…!?」

二人はうろたえた。自分達は時に黄金聖闘士にも迫る力を持つ白銀聖闘士―実力があることを自負していた。それなのに、薄っぺらい膜一枚でこうも簡単に攻撃を防がれるとは…

「貴様らの攻撃など、これ一枚で十分」

涼しい顔で球体膜を消しながら言った冥闘士の言葉に、白銀聖闘士二人の自尊心と自信が傷ついたのは言うまでもない。

「次は俺だ…!!」

状況を打開すべく動いたのはレイファートだ。

「直接的攻撃が効かないとしても、このメドウサの眼からは逃れられまい！」

身に纏うペルセウス座の聖衣の背にある、その目の見つめたものを石と化す禍つ盾「メドウサの盾」を左手に装着する。

「ラスアルグルゴルゴニオ…!!!」

盾の中心に浮かんだメドウサの目が怪しく光り、その光がテイレシアスの網膜に飛び込もうとする。

しかし半瞬にも満たぬ間、テイレシアスの両腕が唸り空を裂いた。黄金聖闘士以外にそれを見切れたものはいなかった——しかし彼らにもこれを防ぐことはかなわなかった。

「ヴァニティ・スリット，！！！！」
「なっ……ぐあああああ——！！！！！！！！！！」

大気が聖剣^{エクスカリバー}の乱舞となつて盾をこまぎれにし、レイファートの体を聖衣ごと切り裂いた。

レイファートは絶叫と共に、自らが降らせた血の雨を浴び、自らが造った血の池に倒れ込む。

「レイファート！！！！！！！！！！」
「レイファートさん！！！！！！！！！！」

六人の聖闘士が同時にのぼせた声を上げる。
冥闘士は意にも介さない様子で言い捨てる。

「フツ……ここは不完全とはいえハーデス様の結界の内。貴様ら聖闘士は弱体化しているのだ。黄金^{ゴールド}はまだいいとして、白銀^{シルバー}や青銅^{ブロンズ}如きが俺の相手になるか」

六人ははっとした。ハーデスの結界による弱体化……そうか。聖闘士の中でも有数の実力を誇るエリナやユングビー、さらには黄金聖闘士であるユバルホークの技が全く通じないなどということは普通はあり得ないのだ。まして、レイファートがこんな風にやられてしまうという事も……

しかし、少なくとも黄金聖闘士の二人は気づいていた。
この男——テイレシアスはどっちにせよ強い。なにしろ、全く本気

を出していないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2929y/>

遙かなる聖戦

2011年11月23日12時45分発行